

3. 肺癌の全身骨シンチグラム

木村 莊一 飯尾 正明

平田 正信

(国療中野病院・外)

森 崎 直 木

(東京女子医大・整形外科)

肺癌の潜在的転移の検出は、治療方針上、重要な意味を有する。われわれは潜在的骨転移を検出する目的で^{99m}Tc-ピロクン酸による全身骨シンチスキャンを行なっているが、その成績を分析し、本法の臨床的有用性について検討を加えたので報告する。

切除例 22 例、非切除例 49、計 71 例の原発性肺癌患者に本法が施行されたが、本検査陽性率は 32 例 (45.1%) であり、これら症例を日本肺癌学会臨床病期分類にしたがって本法施行直前の病期で分類してみると I 期 8 例、II 期 19 例、III 期 28 例で、IV 期のうち骨以外の転移が認められたのは 11 例、骨転移がはじめて認められていたものは 5 例である。本法陽性率は I 期で 25%、II 期で 42%、III 期で 36%、非骨転移の V 期で 64%、骨転移の IV 期で 100% である。組織型別による本法陽性率は腺癌では 20 例中 10 例、扁平上皮癌では 19 例中 5 例、未分化大細胞癌では 7 例中 6 例、未分化小細胞癌では 12 例中 4 例、組織型不明では 13 例中 7 例である。本法陽性病巣は 66 ケ所あり、X 線写真が撮られたのは 56 カ所で、X 線異常所見が認められたのは 30 例である。陽性部位は肋骨、椎骨、下肢骨に多く認められた。また陽性病巣を臨床経過、またスキャンならびに X 線写真による追跡、剖検所見による検討などにより、陽性病巣 66 カ所中 8 カ所が偽陽性と考えられ、また非癌性胸部疾患 27 例中 7 例に陽性所見が得られた事より、本法は肺癌の潜在的骨転移の発見に有力なスクリーニング法であるが、偽陽性も多い事から、その判定には慎重な検討が必要である。

4. 骨隣接軟部腫瘍における骨シンチグラム所見の検討

奥山 武雄 渋谷 均

鈴木 均 鈴木 宗治

(医歯大・放)

^{99m}Tc-pp による骨シンチグラフィにおいて、すでに高い評価が与えられている転移性骨腫瘍ならびにいくつかの整形外科的疾患以外の領域について、その臨床的効用の検討を目的とする。

今回は、骨隣接軟部腫瘍について、骨破壊を伴っているもの、明瞭でないものに大別し、前者については骨原発腫瘍との鑑別の観点からシンチグラム所見の質的差異、あるいは、“invasive” と “erosive” との差について、後者では X-P 上明白でない minimal bone destruction の検出の可能性などについて検討した。症例は骨破壊 (+) 8 例、骨破壊 (-) 10 例の計 18 例。

結果： 1) 骨破壊 (+) 8 例中 6 例が陽性所見を示したが、集積の程度は原発性骨腫瘍に比して遙かに低い。しかも陽性像の大部分は、軟部腫瘍自体を示しており、これを差し引けば、骨破壊部の集積は一段と低くなる。さらに、著明な骨破壊が認められるにも拘らず、全く集積を示さない症例がある。以上の結果は、原発性骨腫瘍の所見とは、異質であると判断された。 2) “invasive” と “erosive” destruction の間に差異は認められない。 3) 軟部腫瘍による minimal bone destruction 検出の可能性は否定的である。

以上の知見を示す症例を供覧した。

小野 (横浜市大・放) より判定の客観性について疑問がだされたが、これはあくまで主観的な判定をもとにしていることを明記しておく。